

法の水茎

大正大学講師 高橋 秀城

(68)

二十四節気の暦通りに、大寒に入ってから日本列島は、厳しい寒波に見舞われました。一月二十二日から降り始めた雪は、高尾山の山頂でも四十七センチ近くの積雪を観測しました。

雪のうちに

春は来にけり

鶯の

凍れる涙

今や解くらむ

(「古今集」二条后)

(雪が残る冬景色のまま、春がやって来た。冬の寒さに凍っていた鶯の涙も今は解け始めて、間もなく美しい鳴き声を聞かせてくれることだろう。)

この歌について「鶯には涙があるわけでもなく、凍るはずもないけれど、鳴くものなので涙といひ、涙あれば凍るといふのは歌の習いである」と評しました。「古今余材抄」の冬の寒さにじつと耐えていた鶯も、人間と同じように春の訪れをきつと待ち望んでいたでしょう。「立春」の響きに勢いよく外面に飛び出せば、雪景色に乱反射する春の眩しい陽光に、ちよつと戸惑うかもしれません。今年も立春を過ぎると、初めて午の日(初午)が巡ってきます(今年は二月七日)。この日全国の稲荷社では初午祭が行われ、高尾山葉王院においても、五色の幟で飾り付けられた稲荷社で「福德稲荷祭」が執り行われます。

この初午の起源は、古く奈良時代以前に遡ると言われます。平安時代の和歌には、

ひとりのみ

我が越えなくに

稲荷山

春の霞の

立ち隠すらむ

(紀貫之「貫之集」)

(二人で稲荷山を越えるわけではないのに、春霞が立つて山を隠しているの、まるで自分だけが霞の中を分け入っているような気持ちになる)と詠われています。今は新暦の寒い時期に行われる初午ですが、もともとは旧暦二月の春先の行事でした。春のお彼岸前の農作業を始める時期に、その年の五穀豊稔や福德を祈つて、稲荷神をお祀りしたのです。やがて稲荷神は商売繁盛の神としても信仰を集め、家内安全や開運などの願いも聞き入れながら、全国各地へと広まってきました。初午には「午」という漢字が入っているように、



高尾山上の稲荷社で行われる高尾山初午福德稲荷祭の様子

動物の「馬」とも密接に結び付いています。農耕を営むにあたって、馬は重要な財産でした。日頃の感謝を込めて、この初午の日を、馬の祭日とする地方も見られます。ところで、人間に飼育される鳥獣や虫魚の総称

折り折りの記 (102)

波多野 重雄

豆撒きのお相撲さんの声太し

二月の暦は節分に始まる。三日高尾山葉王院の節分会追儺式の豆撒きは多くの善男善女や僧侶、お相撲さん、芸能人等が袴を着け大きな枡に「福は内」の豆を撒く姿は壮観である。庭の人々は夫々帽子や風呂敷で豆を拾う準備。歌舞伎のお嬢吉三の名台詞「月も朧に白魚の篝も霞む春の空」の白魚は二月の味覚で隅田川で昔は取れた。「白魚や椀の中にもすみだ川」(子規)節分の夜に厄を落とす風習ふぐり落しという氏神詣での人に見付からぬように袴を落とす方法がある。「厄落とす遠くに神の灯が二つ」(田中王城)(高尾山健康登山の会々々長)

春宵独坐

厚木市 荒井 一雄

老来難 献茶

細雪飾 梅花

解脱前世業

願得仏果華

願得仏果華

あるじなき
庭の老梅咲きはこらん
春風に乘せにほいとどけよ

老ひ来たれば 神仏にお茶湯を
もの憂くなり、細雪は梅の花を
飾らん

前世の業より解脱し、
仏果(仏道修行の成果)の宝華蓮の花を得んとす
ひたすら願ひのみ

仏教においては、六道の二つに「畜生道」を説きます。畜生道は、前号まで見てきた地獄道・餓鬼道とともに三悪道(三途)と呼ばれ、この世での悪い行いの報いによって、死後に畜生となって生まれ苦しむ世界とされています。では、先に見た農耕馬のように、畜生でありながら家族の一員として大切にされてきたのはなぜでしょう。人の身近に暮らす馬をめぐっては、次のような話があります。

した。こうして命を奪った馬は、数えきれないほどでした。後話。男は何となくお湯が煮えたぎっている釜のそばに近づきました。すると湯気によって、男の両目は忽ちにして煮られてしまったのでした。この世での悪い行いの報いは、すぐにやって来ます。ですから、仏法の因果応報の理(苦楽の報い)を信じなければなりません。畜生は、一見すると私たち人間とは縁がないように見えますが、実は前世の自分の父母であることがあるのです。

死後の六道(地獄・餓鬼・畜生・修羅・人・天)という六つの迷いの世界や(四生(胎生・卵生・湿生・化生))という生き物の四つの生まれ方などは、いずれも、来世に自分が生まれる家です。だからこの世では、慈悲の心がなくてはならないのです。(「日本霊異記」)

この話に登場する馬が流した大粒の涙は、いつ

たい何方の悲涙だったのでしょう。もし前世の父母と男が知っていたならば、「お父さん」「お母さん」と語りかけながら、むしろ荷を背負っていたことでしょうか。あるいは、六道の衆生を救う馬頭観音様が姿を変えていたのかもしれない。恩知らずの男に、御身をもつて「慈悲の心」を伝えてくださったようにも感じます。

すべて、
一切の有情を見て、
慈悲の心からんは、
人倫にあらず。
(「徒然草」二二八段)

(全ての生き物を見て、慈しみの心を抱かないとすれば、それは人間とは言えない)

本格的な春に向かつて、寒暖が交互にやって来ること、三寒四温と言います。寒さの後に降り出す温かな「四温の雨」は、もしかすると春霞によって解け始めた「鶯の嬉し涙」なのかもしれません。(栃木北部教区普濟寺)